新 3378 乙 1744 博士（人間科学） 2003/1/15 鈴木 晶夫 ｽｽﾞｷ ﾏｻｵ

2003年 1月10日

人間科学研究科委員長　殿

鈴木　晶夫氏　博士学位申請論文審査報告書

鈴木　晶夫氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱をうけ審査をしてきましたが、2002年12月21日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1.　申請者氏名　　鈴木　晶夫

2.　論文題名　　非言語行動が意識性に及ぼす効果の研究

3.　本論文の主旨

本論文は非言語行動のうち個人内行動である姿勢と個人間的行動である身体接触を取り上げ、それが自らの意識性（ａｗａｒｅｎｅｓｓ）に及ぼす効果について分析したものである。

4.　本論文の概要

第１章では、非言語行動研究を概観し、第２章で本研究の意義と目的を述べた。本研究は、非言語行動が意識性にどのような影響を及ぼすかという機能的研究であり、その実証を目的としている。ここでの非言語行動は、個人内行動として姿勢を、個人間行動として身体接触を取り上げ、関連する健康意識についても検討した。

第３章の研究１，２，３では、個人内非言語行動として姿勢を取り上げ、姿勢と意識性との関係、すなわち、「注意」「自信」「落胆」「拒絶」などの姿勢を実際にとったときとその姿勢をイメージしたときに意識性に及ぼす影響を測定した。それぞれの姿勢について特徴的な意識性が示された。実際に姿勢をとる場合とイメージする場合での明瞭な意識性の差はみられなかった。研究４ではさらに姿勢の様相を変化させ、躯幹の変化と顔面の角度の変化の姿勢について、行動とイメージで意識性を比較した。再び両者に差がなかった。しかし臨場感の評定では、行動とイメージに評定の違いがみられ、姿勢の意識性に及ぼす効果が実証されたといえよう。

第４章の研究 ５，６，７では、姿勢とその他の要因との関わりが意識性に及ぼす効果の

実験で、姿勢と音楽とを組合わせた場合の意識性への影響を調べ、音楽によっても、姿勢によっても意識性が変化することが示された。意識性には姿勢の影響が大きく、特に、明るい音楽でもうつ向き姿勢で聴くと、沈んだ、暗い意識性を示した。さらに、姿勢と言葉を組合せる実験では、一部の組合せに姿勢と言葉との交互作用がみられ、特にうつ向いた猫背の姿勢では「よし頑張るぞ」と発言しても姿勢の影響が大きく、発話の際の姿勢が意識性に与える影響が大きいことを明らかにした。姿勢と歩法を組合わせた場合にも、歩法の違いによって固有の意識性があるが、その意識性は歩行する際の姿勢に影響を受けることが示された。これらから、音楽、発話、歩法のそれぞれの条件で意識性に違いがみられたが、その上に姿勢の影響と交互作用がみられた。姿勢は知覚や行動に影響を与える重要な要素であるといえる。

第５章の研究８，９，１０では、個人間非言語行動として身体接触の意識性に及ぼす効果を検討した。調査により身体接触の年代による意識性の相違を把握した。幼児期、低学年では、両親からよく触られ、年齢が増加するにつれ、父親、母親からの身体接触が急激に減少する傾向がみられた。次に間接的身体接触として、洗濯時の衣類の混合許容度（嫌悪の意識性）を調査した結果、自分のものと父親のものとの混合は、母親のものとに比べ、混合に対する嫌悪の意識が高く、「自分の下着と父親の下着」の混合は最も嫌悪の意識が高かった。一般に同種のものの混合の嫌悪意識が高かった。また、物を共有するという媒介物による間接的（代理的）な身体接触を考え、その間接的な接触が「どれだけ許容できるか」について、父親、母親、兄弟、親友、顔見知り、未知の人という人間関係についてその様態を検討したところ、間接的（代理的）身体接触は相手により許容度（嫌悪意識）の違いがみられ、特に見知らぬ人には許容度が低かった 。また、媒介物によって許容度は異なり、特に、歯ブラシ、下着、肌着、靴下は許容度が低かった。この間接的（代理的）身体接触の許容という事態は人間関係や媒介物によって変化することが示され、間接的（代理的）身体接触という新しい測定方法が開発できたといえよう。

第６章の研究１１の調査では、非言語行動が健康意識に及ぼす効果の研究で、姿勢の自己評価、うつ傾向、健康感、自尊感情との関係について検討した。健康感については姿勢の評価による性差はみられず、うつ尺度については性差がみられた。姿勢評価の良い者ほど健康感尺度得点は高く、姿勢評価の良い者ほどうつ尺度得点は低かった。また、顔の向きや猫背、胸を張っているかどうかなどの姿勢に関する評価の仕方によって、健康感やうつ尺度の評価の結果が異なり、姿勢の自己評価とうつ傾向、健康感とに相関関係がみられた。

第７章の総合考察では、個人内非言語行動の代表である姿勢は意識性に影響を及ぼし、知覚行動や発話行動などの各種の行動の意識性に姿勢が与える影響が大きいことが示された。また個人間非言語行動の代表である身体接触は直接的身体接触でも間接的（代理的）身体接触でも許容度（嫌悪意識）に影響することが実証された。これらのことは非言語行

動が行動主体者である自分の身体及び意識性に影響する、すなわち、非言語行動と意識性は表裏一体であることを確認した。実際に行動することの重要性が指摘された。

5. 本論文の評価

研究1ではこの研究の出発点となったジェームスの姿勢の研究で得られた、注意、拒絶、落胆、自信の姿勢の解析を行い、そのような姿勢をとったときの意識性について調べた結果、それぞれに異なる特徴的な意識性(気分評定)が感じられることが示された。

これにもとづいて研究2、３，４では実際の姿勢とイメージされた姿勢とについて意識性との関係を調べたところ、姿勢に固有な意識性が生ずることが確認された。しかし身体反応とイメージとの間には差が見出されず、意識性の現実感に差が見られた。

以上の諸研究からある特定の身体反応(姿勢)はある特定の意識性と関係があることは、確かめられたが、それが身体反応自体から由来するのか、認知を介在しているのか確定できなかった。一つには意識性の調査が認知を介在していること、その二は大人では両者を実験的に分離することは困難であることによる。ここでは姿勢という身体反応は認知をともないつつ、意識性に関係をもっているという事実の発見が重要である。しかしイメージよりは身体反応のほうが現実感をともなうという点は身体反応の意味を示しているといえる。

次の研究５、６、７は姿勢が他の行動がもつ意識性にどのような影響を及ぼすかについての研究である。音楽を聞いたり、発言したり、歩行く時にそれぞれがもつ意識性はその時の姿勢によってその意識性が変わってしまうという事実が明らかにされた。

これらの研究は、姿勢が外界の知覚を歪曲し、伝えるべき発言行動の内容をあいまいにし、歩行がもたらす気分を変えてしまうということであり、姿勢がもつ影響の大きさを示したものである。

非言語行動を論ずるときには、個人内の行動だけでは不充分で、個人間の行動も取り上げなければならない。その一つとして身体接触が取り上げられ、研究８，９，１０が行われた。発達にともなう身体接触の変化の様相を明らかにしたが、これはその後の研究でも再三確かめられている。成人の身体接触の研究は手続き的に困難であるため、洗濯における混合の許容と物の共有の許容という方法を開発した。その結果、混合と共有の許容度（嫌悪意識）は、身体接触の調査で得られた結果と矛盾しないもので、この方法の有効さを示している。身体接触は年齢や対象の人物によって、それがもたらす意識性(嫌悪感)が異なることが示された。

研究１１では姿勢についての意識が健康感やうつ反応に関係することが示された。この事実は健康心理学的な観点から考えたとき、姿勢がもつ意義をあらためて考えさせられるものである。

以上のような諸研究は、以下のように評価することができる。１）特定の姿勢が特定の

意識性に関係があることを実験的に示したこと。姿勢についてのこのような研究はあまり行なわれておらず、貴重である。2）実際の身体反応による意識性とイメージによる身体反応の意識性の違いが現実感の差に見られたことは、少なくとも実際の身体反応の意味を示したものといえる。3）姿勢が他の行動や知覚と交互作用を持ち、その意識性に影響力をもっていることを示したこと。4）身体接触の発達による変化の様態をはじめて明らかにした。この調査の結果は、その後再三確認されていること。5）4）の結果を踏まえ、成人の身体接触の研究方法を開発したこと。この方法によっても4）の事実と同様な事実が確認できたこと。6）姿勢に関する意識が健康感やうつ反応と相関する事実を初めて見出し、姿勢と健康心理学の関係に問題を提起したこと。以上のように、個人内の非言語行動（姿勢）と個人間の非言語行動(身体接触)ともに、非言語行動は意識性と深く関わりあっていることを事実の発見や身体接触の新しい方法の開発をしながら、明らかにしてきたものである。よって博士(人間科学)の学位を授与するのに値するものと認める。

6. 鈴木　晶夫氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授	文学博士（早稲田大学）	春木　豊　印
審査委員	早稲田大学教授	医学博士（東邦大学）	山崎　勝男　印
審査委員	早稲田大学教授	博士（人間科学）（大阪大学）	根ヶ山光一　印